

国際食農経済研究会 (SILA)

中川 隆

Takashi NAKAGAWA

1 研究会の概要と構想

国際食農経済研究会 (SILA) を2009年8月に立ち上げました。略称は、ドイツ語の Seminar für Internationale Lebensmittel- und Agrarökonomie の頭文字をとってSILAとしました。研究会に「Seminar (ゼミナール)」と、ドイツ語をあてたのも、私が学んだドイツの大学の良さをとり入れた自由な雰囲気の中で研究会活動を行いたいという強い思い入れがあるからです。

以下の文面は、本研究会の設立の趣意です。《近年、食品流通の広域化・国際化の進展により、食と農の乖離が進んでいる。消費者・生活者は、自らの食する食品が「いつ、どこで、だれが」生産・流通・加工し、自らの手に届いたのかが見えにくくなっている。このような状況下において、食の安全を脅かしたり、消費者の食への信頼を傷つける事件が頻繁に起きている。また、食と農の乖離は、食品産業や外食産業に海外原料の調達行動を促進させ、食料自給率を下げる要因ともなっている。一方、地産地消や農商工連携に典型的なように、農業サイドが、地域の持つ観光資源や商業資源を積極的に活用することで、農村経済における雇用創出、地域経済の活性化、食料自給率の向上などを図ろうとする動きも見られるようになっている。

以上の基本的な問題認識のもと、本研究会

は、食品生産を経て流通・加工・小売・外食・消費に至る「食」の問題、農業・農村・農業経営にかかわる「農」の問題について、国際的視点から、幅広く捉えることを目的とする。》

研究会のメンバーは、2010年6月現在、学生4名と教員5名で構成されています。甲斐大啓君、姜花さん、セレスト・アミト君、鄧学武君、阿部博光先生、鄭玫朱先生、中道眞先生、河合研一先生、私 (中川隆) の9名です (写真1) (セレスト君は、写真撮影当日欠席)。3名の学生は、留学生です。食と農の問題を考える際、海外諸国、とりわけ北東アジアとの関係を抜きにして、語ることはできません。今後の研究会活動を通じた活発な国際食農交流が期待されます。また、学生と教員が無差別に所属しているのも本研究会の大きな特徴の1つです。研究会のメンバーになって頂いている先生方の専門分野は、環境経済学やマーケティング論、国際経営論・多国籍企業論、統計学・計量経済学と、多彩です。これにより、多角的・学際的視点で食農経済を捉えることが可能です。

私達には、研究会活動を通じて、国際経営学部を、別府大学を、もっと大きく言えば、別府・大分を盛り上げていきたいという熱い想いがあります。

2 活動内容

今後の国際食農経済研究の基盤として、経済学を学んでいます。全世界で使用されている経済学の入門テキスト (言語は英語) を輪読しています。最初は頑張ってついてきてくれるか心配でしたが、杞憂でした。「中国語や韓国語の翻訳版が欲しい」という留学生達からのリクエストもあり、真剣に取り組んでくれている姿勢が、非常に頼もしいです。韓国語が堪能な中国人留学生の姜花さんは、英語版と韓国語版の両方に挑戦しています。

これまでの活動として、大分県食料産業クラスター協議会の研修会や大分県農林水産祭に参加しています (写真2)。学外のイベントに積極的に参加することで、学生・教員間の交流を



写真1 国際食農経済研究会のメンバー

深めるようにしています。また、2009年11月には、日田市大山町の「木の花ガルテン」や「株式会社 おおやま夢工房」を訪れました(写真3)。物産館(直売所)で、地域で生産された農産物を知り、価格を知り、食の安全や流通について学んだり、地域で採れた新鮮な食材を食し、食料自給率や地域経済のあり方などに思いをはせることも本研究会が目指す大切な学びの1つです。

最近では、大分農業文化公園・別府大学「棚田づくりプロジェクト」にも研究会として深く関わっています(下のコラムを参照)。

このように、積極的なフィールドワークを通して、農業や農村、食品産業の実態を学んでいます。

今後は、地域農業や地場食品産業の実態だけでなく、北東アジアや大洋州、欧米などの海外の農業や食品産業の実態調査なども視野に入れ、国際的視点から、食と農の経済研究に取り組んでいきたいと思っています。



写真2 大分県農林水産祭に参加(2009年10月)



写真3 木の花ガルテンで昼食(2009年11月)

大分農業文化公園棚田プロジェクトが本格始動！

2010年1月14日、別府大学と大分県による「大分農業文化公園棚田プロジェクト」に関する協定が結ばれました。本プロジェクトの取り組みの概要は、農地等の保全・利活用に係わる学生・教職員の活動参加ネットワーク(「別府大学夢米(ゆめ)棚田チーム」)を結成し、大分の中山間地域の農業・農村の活性化を図ろうというものです。協定が締結された当初は、参加学生の総数は45名でしたが、2010年6月現在で約80名に増えています。これまで、2度の米づくり講座(2010年2月、5月)や現地視察(2010年4月)、播種(2010年6月)などの活動が行われてきました。国際経営学部の学生にとっては、米づくり講座の内容は、経営学や簿記などの普段学んでいる専門科目とは全く異なる農学分野のお話で、とても新鮮だったようです。また、食物栄養科学部と文学部、国際経営学部による学部の垣根を越えた全学的なプロジェクトであるため、参加する学生の皆さんにとっては、学生間でタテとヨコのつながりを自由に築ける交流効果も大いに期待できます。



写真5 学生リーダーの横道さん(左から2人目)と国際経営学部の教員

食物栄養科学部の江崎一子先生、文学部の利光正文先生の御指導を頂きながら、本プロジェクトは順調に進められています。最近では、水稻播種作業を行いました(写真)。育苗箱に床土を詰める作業や乾籾を均一に播く作業、覆土後に育苗箱を並べてシートで覆う作業などを行いました。これらの作業は、農家であっても農協に委託するケースが増えたため、今回のような体験は、まさに非常に得難いものであったと思います。

農作業を実践することで、農業・環境・食育問題を体で感じ、学んでいく「大分農業文化公園棚田プロジェクト」。食文化論、景観保全論、農業経済学、など、あらゆる切り口から、その価値を、大学全体で考えていければ、と思っています。



写真4 土詰めを行う学生(2010年6月)